騎士団長、無礼ですよ

弘道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
騎士団長、無礼ですよ

【Ｎコード】
Ｎ５４６２Ｘ

【作者名】
弘道

【あらすじ】
とある国の女王エルネスティーネ（エル）と、その騎士である、ラインハルト（ライン）の繰り広げるドタバタな毎日。
女王陛下は最近情緒不安定です。
話の構成なんか考えていないのでとんでも無く雑！

（追記）女王陛下と騎士団長が予想外の方向へ突っ走り当初の予定と大幅に狂ってしまいました！

作者にはどんな話になるのかさっぱり予想ができません！

結末は神のみぞ知る！

おおかみさん、こんばんは（前書き）

はじめまして、見切り発車のやっつけ仕事です。見てくださると、嬉しいです。

おおかみさん、こんばんは

はじめまして、こんばんわ。

えっと、エルネスティーネ・エンゲルハルト（十七才、職業姫）、只今ピンチです。

子羊さんを食べようとしてた狼さんは仔羊さんの真上で眠ってしまったようです。

私は、そこまで大きくも無く、かと言って小さくもないようなまあ、普通の国の王家で一人娘として生まれ、その時身体の弱かった王妃は難産の末死亡、反動でか親バカになった父上に、蝶よ花よと育てられ、普通にお姫様に育ちました。

私が十二の時、父上は病気で亡くなり、たった一人の王家の血を引いている私が王位継承権第一位ということで、私が女王となってしまいました。

それから五年、死に物狂いで政治やら護身術やらを学び、気づけば「この世で最も民に好かれる治世者」と言われる様になってました。びっくり。

そして、私をよく思わないもの達から守ってくれたのが、今私の上で眠りこけている、騎士団長、ラインヴァルト・フェルゲンハウアーです。

私がいま生きているのは結構この人のおかげというのが大きいのですが、何故か彼は今、私の寝込みを襲い、私の上でそのまま寝てしまった様です。

どうしてこうなった！

いけめんですね。

数分前の話をしましょう。

いつもどうり、お風呂にはいってゆっくりしてからお布団に入りました。ぬくぬくで気持ちよく眠りにつこうとしていると、扉があきました。

でもまあ、ラインの巡回だろうと気にもせず、（ラインは騎士団長なのでラインだけは私の部屋に自由に出入りできるのです。）うとうとしていると、いきなりラインが、

私の上に乗ってきたのです！

いきなり上を向かされ、馬乗りになられた私はびっくりです。

それこそ私が十になるかならないかの頃から私の騎士をやってくれていたラインなので、私の彼に対する評価は絶対的な丸で、危険の二文字は全く縁が無かったのです。

うえええ！？これどうしたらいいんですか？人を呼ぶべきですか？

私の頭の中はパニックです。そりゃあもう本当に困りました。

ラインはなまじ顔がいいのです。金のさらさらした髪の毛はいつもオールバックなのに今日はお風呂あがりなのでしょうか、降ろされています。切れ長のアイスブルーの瞳は、いつもはひどく冷たく見えるのに、今日はなんだか潤んで頼りなさげです。いつもはいかめしい、それこそちっちゃい子と目が合っただけで泣き出させることのできる様な顔をしているのに、今日はひどく不安げです。

あと、しろい肌が赤く染まっていてなんだか……酒臭いです。飲み過ぎです。一国の騎士団長ともあろうものが何をやっているのか…これは酔いが冷めたら叱りつけなければ。

そんなこと考えてると、彼はいきなり、私にキスをしはじめました。何をするんですか！

抵抗したいのに、両腕は押さえつけられ、女と男の差を見せつけられている気分です。

口だけで無く、耳やら鎖骨やら、いろんなとこにちゅ、とキスをしていきます。

そんなこんなでかれはわたしに…すっごく深〜いキスをして、（息が苦しい！）わたしの顔の横に頭をおいて、わたしの耳元で「姫様」とわたしの事を呼びます。私が姫だったのはだいぶ前だったのに、彼は何故わたしの事を姫様と呼ぶのでしょう…？

「愛しております…」

そうつぶやくだけつぶやいて、彼は、寝ました。

ああもう！なんでいうだけ言って寝てしまうんでしょう。これじゃ

本気なのか冗談なのかわかりません。…まあ、ラインは冗談なんて言える人間ではありませんが。

というか、重いです。ベッドの下に落として仕舞おうかと思いますが、きっと彼がこんなに酔っているということは、なにかいやな事があったのか、よほど疲れているのでしょう。このままねかしてあげる事にします。

…はしたない事くらい、わかってますよ？でも、ラインはなんかすっごい暖かいのです…人間湯たんぽが欲しい季節なのです。しかも。なんか全てがどうでも良くなりそうなくらいカッコ良いのです、雰囲気が。

仕方ないので、寝がえりの要領で彼を横へ下ろし、ふとんを引っ張って彼にかけます。彼は私を抱きしめたまま離さないので、作業は難航します。それでも、彼はいけめん？というやつ（廊下で侍女達が言ってました）なので、なんだか許せてしまいます。

とりあえず朝起きたら怒りましょう、そう思って彼の腕の中でゆったりと眠りにつきました。

騎士団長、悩む（前書き）

お気に入りしてくれた三人の方、ありがとうございます！

騎士団長、悩む

あー…これは一体どういう事だ。

朝目覚めて、ああ、今日は昨日部下がしでかした器物破損の処理班書類と新しい武器などの申請書類を仕上げなければ…昨日飲みすぎたな、二日酔いで頭ががんがんする…

とまで考えた時、ふと腕の中に暖かさと重さがあるのに気付いた…えっ。

俺は昨日何をしていたっけ…部屋で飲んだはずだから女に絡まれるはずもないし、ええっと…

その時、腕の中の主がくるりと寝がえりを打った。

…女王陛下？

いやいやいや、お前は主君の寝込みを襲う様な男では無かったはずだ、ラインヴァルト。そうだろ？そうだといってくれ！

でも、腕の中ですやすや眠る彼女を見ているとなんかどうでもよくなってきた。くそっ、昨日の俺はなにしたんだ！記憶がないのがやけに恨めしかった。ーーじゃない！！

なんでだ？！なんで女王陛下が俺の腕の中で寝てるんだ？落ち着け、俺。周りを良く見るんだ……女王陛下の部屋じゃないか！！

これは完璧に俺が襲ったのか…？

「んん……」

ちょっとまて！頼むから俺に擦り寄らないでくれ！なんなんだこの可愛い生き物！！

うおおお…と普段冷静沈着と言われる男、ラインヴァルトは、ものすごく焦っていた。

もちろん、顔に出さずに。

そんなラインヴァルトの気も知らず、エルは、目が覚めた。

「ん…ラインヴァルト？……今すぐ私から離れてそこに直りなさい！！」

狼で無く子犬でした

「ん…ラインヴァルト？……今すぐ私から離れてそこに直りなさい！！」

びっくりした。朝、なんだかいつもより暖かいなと思いうとうとしていると、いつもは無いはずの何かがそこに居て、上を見ると、目が合ってしまいました。

…なんでラインヴァルト騎士団長がこんなとこにいるのでしょう。考えるよりも早く命令が口からでます。

命令されたラインヴァルト騎士団長は恐ろしいほどのはやさでベッド下でひれ伏しました…すごい、猫を見ている様だわ…。

「誠に失礼いたしました陛下、その…不躾ながら昨晩、何があったのか聞いてもよろしいですか？」

…昨日あれだけキスをしておきながら覚えていない、ときました。これだから酔っ払いはダメなんです…

「ラインヴァルト騎士団長、貴方は昨晩私の上に馬乗りになって、……その、そのまま私の上で寝てしまったのです。…覚えてないのですか？」

恥ずかしい、こんな事が知られれば嫁の貰い手が無いです…

私の言った事を聞いた彼は、一瞬、顔を青くし、その後、無表情に戻りましたが…目が捨てられた子犬のようです…そんな目したって許しませんからね！…ううっ…捨てられる心配をしてるような目は反則です…これがイケメンの力ですか？

「……今回は…不問に処します。二度とこの様な事のない様に。お酒の飲みすぎは身体に良く無いですよ、貴方は私にとって大切なのです、身体を大切にしてください。」

それを聞いた騎士団長は無表情なのに、目が輝いています。
……騎士団長にしっぽと耳が見えます。眼科へ行ったほうが良いのでしょうか…？

いつもはわかりにくい彼ですが、今日は何故か手に取るように分かります。
…これが侍女の言っていた一緒に寝ると相手の事が手に取るように分かる、ってやつですか？

なんか違う気もしますが。

でも、ラインヴァルト騎士団長、とりあえず部屋から出て行ってくださいな。

心が広いですね。

…今、馬乗りになってそのまま寝た、って言ったのか…？

え？誰が？誰に？

陛下の顔を伺うと、顔を真っ赤に染めて照れていらっしゃった。

つくづく昨日の自分が憎い。

何故覚えていない！？

ちょっと待て、これが本当なら俺は騎士団長を辞職…いや、死罪になりかねん、まさかそんな事で死にたくはない…が、殺されても文句のつけようのない事を俺はやってしまったのだし…

「今回は不問に処します。」

神なのかと思った。冗談抜きでだ。

さすが、我々の女王、心が広い。

しかも、俺の身体の心配までしてくださったし、貴方は私にとって大切なのです、なんて言われてしまった。

どうしよう、今日はまともに仕事ができない気がする。

視察という名の脱走です。

その後ー。

エルネスティーネ女王は、侍女服を着ていた。

侍女のために新しく服を注文する時に一着多めに頼んでおいてよかったです。変装もばっちりですし、これなら怪しまれずに城下へ行けます！

エルは、よく、城下視察、と銘打って城を抜け出す。その度、騎士団の警戒がひどくなるのだが、いかんせん女王の変装が上手く、だれにも見破れないのだ。

ちゃんと事前にお金を銅貨と銀貨に両替しておきましたし、言葉使いとかもちゃんと勉強したのです、なにも心配はありませんわ！

今日はなにをしようかしら、久々に裁縫とかしちゃおうかしら、だったら手芸店からいくべきでしょうか…ああ、でも侍女たちが新しい菓子屋のマドレーヌが美味しいと言っていたわ…でも小間物屋も見たいし…でもあんまり買い物しすぎては怪しまれるからほどほどにしなくちゃ。

わくわくと城下でなにをするか考えながら城を出ると、今日はなんだか城下がにぎやかです。

「ねえ、お爺さん？今日は何かお祭りでもあるのかしら…やけに街

が騒がしいけれど…。」

「ああ、なんでもとなりの国の王子が女王陛下に結婚を申し込みに来たんだけど城に申請するのを忘れていて申請が許可証されるまで城下でお過ごしになるらしくて…顔がいいから、女共が騒いでるんだよ、興味あるかい？」

そんなのはじめて聞きました。でも私は政略結婚なんて嫌ですし、この国に居続けたいわ。

「いえ…あまり見世物にされても王子様がお疲れになるでしょうし、それに見てしまってもあまり得にはなりませんもの。」

「はは、思いやりがあるのか、現実的なのか…好いた男でもいるのかい？」

ぎく、そんな音が胸からして、頭の中は騎士団長でいっぱいになりました。なんでですか！！

「仕事で一杯一杯ですから…でもかっこいい殿方がゴロゴロしてるんで目に毒です…」

これは嘘じゃ無いですよ、あれです、ダンディーなイケメン宰相さんとかいつもにこやかな大臣さんとか…クールな騎士団長とか…

「そうかい、そうかい！わしも若い時はたいそうモテたものじゃ！嬢ちゃん、気丈に生きなよ！」

はい、ありがとうございますといってご老人と別れました。なかなかの好々爺でした。城下の皆さんはいつも元気で明るくて、こちらまで元気になれます。

足取り軽く、とりあえず菓子屋へ行く事にしました。

幸せです。（前書き）

評価とお気に入り件数が恐ろしく増えていました！びっくりです。
こんなに評価して貰っていいのか不安になりますね…

感想を書いてくださった木下さん、ありがとうございます。

幸せです。

今エルネスティーネはとっても幸せです。

城下で評判の菓子屋、メヂュンで、マドレーヌを買おうと店内をうろうろしていると、店員さんがいっぱいおまけしてくれたのです。せっかくなのでここで一ついただいて紅茶を飲んでから移動しましょう。

ここのマドレーヌ、本当に美味しいわ…紅茶とマドレーヌがぴったりあってて最高です。

ふんふふーん、なんて鼻歌を歌いそうになるくらいにこにことマドレーヌを頬張っていると、かっこいい男の人が話しかけて来ました。

「ねえ、相席いいかな？」

にこっ、って効果音がつきそうなくらい輝く笑顔で言われてしまっては断れません。どうぞ、というと、ありがとう！とこれはまたキラキラとした笑顔で笑いました。…白い歯がとても眩しいです…！

せっかくなので、と一緒にお話をしました。なんでも彼は、初めてこの街へ来て、とりあえず評判の菓子屋から覗こうかな、とここへ来たそうです。

「ねえ、このあと良かったら城下の案内してくれない？来たばっか

でなにもわからなくて…ここ来るのに三十分もかかっちゃったんだ。」

それは大変です。私も暇でしたので一緒にうろうろするのも楽しいかもしれません。

「構いませんよ、何処か行きたい所はありますか？」

「そうだな…君は何処へ行くつもりだったの？」

私は…余り計画してなかったんですよね…うーん、殿方の好みそうな所…万年筆屋さんから行きましょう。

「万年筆屋へ行こうと思っているのですが、どうですか？」

「いいね、ちょうど新しいのが欲しかったんだ！」

なら良かったです…！万年筆屋へ行く途中、いろんな話をしました。ここへ来る途中、目が金と青の猫を見た、それ見た人は幸運が訪れるらしいです、みたいな話から、好きな人はいるんですか？結婚を申し込もうとしてる人ならいるよ、とか。

こんなカッコ良くて優しくて笑顔が素敵な人と結婚するならその人はきっと幸せですね。

あ、そういえば彼の名前はジャン、というそうです。隣国の名前はちょっと不思議な響きがします。

万年筆屋へつき、万年筆を見て回っていると、とっても可愛い、桜柄のうす桃色の万年筆を見つけました。これ可愛い…！

その隣にあった万年筆は、黒地に金と綺麗なアイスブルーの装飾が施されていて、ライン騎士団長のことを思い出しました。

…たぶん今頃脱走が発覚して大騒ぎになって騎士団が派遣される頃でしょうか…ごめんなさい。

これ、ライン騎士団長にあげたら喜ぶでしょうか。うーん、日頃おかけしている迷惑のお詫び、として贈りましょうか。

…いや、でも桜柄の万年筆欲しいですし…うーん…また今度でいいです…あまりお金を使いすぎてもいけませんし。

店の店員さんに頼んで万年筆をラッピングして貰います。

横で、ジャンさんが桜柄の万年筆と茶色の万年筆を買っていました。

…桜柄買われてしまったわ…彼女さんにあげるのでしょうか。

そのあと適当に街を歩いて、ジャンさんが、もう帰らなくちゃ、と言われたのでお別れすることにしました。

別れ際、ジャンさんが桜柄の万年筆を私に渡しました。

「今日、街を案内してくれたお礼！」

そんな、街を案内しただけで頂けないです、というと、

「俺からの気持ちだから、遠慮しないで、貰ってよ！ね？」

と言われて押し付けられてしまいました。…うれしいので素直に貰っておきます。

またいつか会えたらまた一緒に町歩きしようね、と言われてそのままいってしまわれました。

彼女さんと幸せになれるといいですね…。

…城に帰らなくちゃ。

女王失格です。（前書き）

気づいたらデイリーランキング恋愛部門で七位になってました。

…本当にこんな評価頂いていいんですかね、ドッキリですか？

お気に入り件数１００件超えました。目玉が飛び出るかと思いました。

ありがとうございます。恐縮という言葉が背中に乗ってます。

女王失格です。

お城に戻ると、鬼のような形相のライン騎士団長が待っていました。

「すいません…」

先ほどから騎士団長は何もおっしゃりません。

…でも威圧感が半端無いです。

帰ってきて部屋へ行くと、騎士団長と侍女達が待っていました。

…ごめんなさい、本当にごめんなさい。

だからそんな無表情やめてください！

耐えきれなくなった私はお土産のマドレーヌを侍女に渡しました。

侍女達はそのまま退室しました。

…ひどくないですか、置いてかないでください…

この威圧感のなか二人切りってなんなんですか、なんなんですか！

！（大切なことなので二回言いました。）

「…陛下、頼みますから、何も言わずに何処かへ行かないでください。」

本当に心配したのです。

そんな言葉が聞こえてきそうなくらいしゅん、とした言い方をされました。

よく考えてみれば今日はメモをおいていきませんでした。忘れてしまっていたのです。

一国の主がいきなり姿を消せば、そりゃあ大騒ぎになります。しかも王ならまだしも、私はまだ十七の小娘です。攫われたかもしれないとおもわれるのも当然です。

なんてことをしてしまったのでしょう。

いつも少し叱られるだけで済んでいたのですっかり頭から抜け落ちた、しごく当然の事。

臣下にかけるめいわくの事を考えないなど女王として失格です。

「…ライン騎士団長、本当に、すいませんでした。とても迷惑を掛けましたね、女王として失格ですわ。本当にごめんなさい…。」

そう、つぶやくように言うと、ライン騎士団長はそっ、と私の頭をゆっくりと撫でました。

騎士団長が女王を撫でるなんて聞いたことありませんが、とても落ち着くので素直に撫でられておきます。

まさかの再会です。（前書き）

日間五位取りました、夢じゃないのかほっぺたひっぱってます。

感想くださった伊咲さんありがとうございます！励みになります。

まさかの再会です。

街で聞いた王子様、本当に来てるそうです…

あんまり城下に留めるのも失礼ですし、謁見の許可を出しました。

次の日、王子様たちが城へ訪ねて来ました。私は謁見の間で待機ですが、侍女たちは朝早くからさまざまな準備をしてくれています。

今日は正装なのでおなかが苦しいです。

コルセット、必要なんですかね？

もし出来るのなら禁止令を出したいです。

職権乱用ですかね…。

お腹が空きました…でもコルセットきつくて食べる気になりません…

あーあ、はやくおわりませんかねー…

おや、王子様御一行が到着したようです、気をひきしめなきゃ。

隣にはライン騎士団長が控えてますが、かれはいつもより威圧感がすごいです。

相手にあんまり威圧感与えすぎるのもどうかと思いますけど…

謁見の間に王子様御一行が着きました…

あれっ、何か見覚えがある人が居ます……

「…ジャンさん？」

「あれっ、女王陛下、僕の事知っていらっしゃるんですか？」

あれっ、これで他人の空似だったら恥ずかしすぎる。

「えーと、その、万年筆屋一緒に行きませんでした？」

「ああ、あの時の！」

よかった、思い出したみたい。

あれ、

「

女王陛下？

王太子殿下？

」

「ええーっ！？」

可愛らしい騎士団長はいかがですか？（前書き）

お気に入り件数、総合評価数、ユニーク読者数がとんでもない数になってました。
ありがとうございます！一人でみて悶えてました。

今回は久々のライン騎士団長登場回です。
…おかしいな、毎回出すつもりなのに。

可愛らしい騎士団長はいかがですか？

王子様が実はジャンさんだったので、従者たちに退場してもらい、二人でお茶会をする事にしました。

「まさかエルちゃん女王様だったとかびっくりしたー。城下にいた時全然気づかなかったよー。」

「初対面の人に女王だってばれたらそれはそれでびっくりですけどね。」

そんな軽口を叩き合いながら、ほのぼのと茶会の時間はすぎてゆきました。

もう少しこちらにとどまるそうなので、またお茶しましょう、と今日はお別れしました。

部屋に戻り、堅苦しい服から開放され、すがすがしい気持ちでいると、ライン騎士団長が訪ねて来ました。

あんまり婦女子の部屋に一人でたずねるものじゃないとおもうのですが、彼はそんなことこれっぽっちもかんがえないのでしょうか。

でも、彼の顔を見ると眉間のしわがものすごくーーそれこそ金貨が挟めるくらいーーよっていたのでなにも言わない事にします。

ながい沈黙の中、何か私は粗相でもしてしまったのでしょうか？と

不安になってしまうくらい…いや、嫌がらせなのかと思うほど待って、やっと彼は口を開きました。

「……陛下…、この国を出て行くのですか。」

ちょっと待って下さいぃぃ！？

え、何でそうなったんですか、どうしてですか？へ？女王が国を出たらだれが政治をするんですか！？

しかもなんで疑問符がついてないんですかぁぁ！！

震える声で質問を返す。

「な、なぜ、そう思うのですか？」

「…貴女は、結婚するなら恋愛結婚がいい、とかねがねおっしゃっていました。……しかし、今日いらっしゃったジャン王太子殿下と陛下は、立場も、見た目も年齢も性格も、女王陛下の婿になるには充分です。

……それに、たいそう仲がよろしいご様子でしたし…」

そんな事で。なんだか、母親が何処かへ行くと、置いていかれたのではと心配する子供のようです。

「ライン騎士団長、よく聞いて。いくらなんでも会ったばかりの人間同士ですぐ結婚するとおもってしまうのは相手に失礼だわ。もし、私に好きな人がいたらどうするの？返事をまだしていないのに結婚後の事を考えるのは早計すぎるわ。」

ライン騎士団長の目がきゅるん、として見えるのは気のせいかしら…ここ最近彼は何だか可愛くなっている気がします。気のせいです

ね、きっと。

そんな事をぐるぐる考えていると、ライン騎士団長がいきなり私のお腹に顔をうずめてきました。…へ？

私は椅子に座っていて、彼はその前に跪いていたので、そのまま抱きついてきました。

…一回この人不敬罪でなんらかの処罰を受けた方がいいんじゃないかしら。

でもぎゅーってされるのなぜか嫌ではないのでそのままにしておきます。

…次はないんですからね！！

大団円ですね！（前書き）

実力テストが終わったのでやったぁー！と更新しましたが期末テスト週間に入りました…学校はなにかんがえてるんですかね。ひどいです。

期待してくださった方、すみませんでした。これからも弘道をよろしくおねがいします

大団円ですね！

「非常に心苦しいのですが、このたびのご縁談、お断りします。」

大変にこやかにお断りの文句を口にして、どよめく大臣を黙らせました。

…私の大臣たちはみんな言うことをすぐ聞いてくれるので助かります。

「これからは良い友だちとして、仲良くしましょう？

国交もそうすれば解決ですし。それに、私はこの国の長です。ならば、この国の者と結婚したいのです。

それに、わたし、ジャンさんのことは魅力的だとは思いますけど、結婚したいとは思えないですし。ジャンさんも男なら亭主関白で居たいでしょう？

でもわたしは女王ですからよその国の男に国権を握らせるわけには行きませんから。」

ジャンさんもそれで納得した様です。かたく握手をして、このたびの問題は解決しました。

最後、耳元でジャンさんは、

「本当は、国に好きな子がいるんだけど国交のために諦めようと思ったんだ……本当、感謝するよ。これからもちょくちょくお茶会でもしよう。…恋バナもしたいし、ね？」

「…はい！」

それならよかったです。幸せになってほしいものです。

お茶会もたのしみです！その方もお呼びしましょう。

ジャンさんは手をぱたぱたと振っておかえりになりました。隣国はみんなあんなにフレンドリーなのでしょうか、それともジャンさんだからなんでしょうか…？

そうして双方うふふあははと話の纏まった謁見の間で、内心ドキドキしている男のすがたがあったが、それはまた別のお話。

女王、小悪魔ですか？（前書き）

定期テスト週間入りました…！！
死ぬ！何もする時間がないです！
誰かわたしに三時間ずつくらい時間を分けてください！

女王、小悪魔ですか？

それは、前例の無い事態だった。

隣国の王子に求婚された女王が、女王側から断りを口にする。

しかも、国交問題によりすぐにでも同盟を結ばなくてはいけないような国との縁談。

しかも王子と女王の仲が良好、二人とも結婚適齢期で年齢的にもピッタリだったのにである。

まさに、歴史上の女性の立場を覆すような英断を、誘われた茶会を断るかの様にすぱっ、と断った女王は、やはり、只者では無いのだろう。

さすが、我らの女王。

ラインヴァルトはそう心の中で思った。

ーーまあ、本人は意識していないであろう、深層心理に作用されて美化されているのであるが。

騎士団長は心の中はもう跳ね回りたいほどの歓喜で胸が一杯、下手したら嗚咽が漏れそうな状態であったが、そこはさすがの鉄仮面。

微々たる動揺すら誰にも気づかれなかったという。

…約一名を除いて。

まあそれはさておき、ラインヴァルトはその後、とある一言によって頭を抱える事になる。

「…国交も…ですし。それに、私はこの国の長です。ならば、この国の者と結婚したいのです。

それに、わたし、ジャンさんのことは魅力的だとは思いますけど、結婚したいとは思えないですし。ジャンさんも男なら亭主関白で居たいでしょう？

でもわたしは女王ですからよその国の男に国権を握らせるわけには行きませんから。」

それは、同じ国に属している、臣下の男なら良いのだろうか！

その疑問がぐるぐるとラインヴァルトの頭を駆け巡る。

それでもまるで周りに人がいないかの様に和やかに、女王と隣国の王子は会話をしていて、全く女王の狙いが読み取れない。

…いや、あの人なら天然それをやってのけるだろう。あの人は本気で断るためだけにああ言っただけで別に深い意味は無いのだ。そうに決まっている。

騎士団長は、そうして上の空で隣国の王子とその一行を見送った。

女王でもキレる時はキレるのです。（前書き）

たまにはシリアスです。

時代交渉とか無視です。この時代は政略結婚とかあったんでしょうか…

女王でもキレる時はキレるのです。

その後、女王は口うるさい大臣達に怒鳴られ縮こまっていた。

「あなたはどーしてあんな重要なこと誰にも相談せず一人で決めてしまうのですか！あーもうどうしましょうあちら側の気を害していたりしていたら…！」

顔を真っ青にする大臣を前に、女王はとんでもない爆弾を落とした。

「だって、私結婚する気無いんですもの。」

その場に居合わせた大臣達は、数秒固まって、真っ青になって、そのあと、

「「えええーーーーーッ！！？」」

と叫んだ。この叫び声は城下まで響き渡り、騎士団が出動しかける騒ぎになったのだが、それはおいておこう。

「なんでそこで叫ぶんですか！？別に結婚する気が無くてもいいじゃないですか！まだ独り身で好きなことしてたいです！」

「だめです！！女王が子を作らなくてどうするんですか！国を治めるものとしての義務です！子孫を繁栄ーー「もういい！！」

女王は顔を真っ赤にして、涙を流しながら叫んだ。

「もういい…もういいからさがって。下がりなさい！！」

大臣達は女王を本気で怒らせてしまった事に気づいてうろたえていた。

そのまま部屋を出て行く事を躊躇していると、女王はすっくと玉座をおり、カツカツカツ…と足音を響かせながらへやへ戻っていった。

そのあと、そこにいた一人の女官が、大臣達に向かって吐き捨てるように口を開いた。

「あの方…いいえ、あの子はまだ十七なのです。好きでも無い人間と添い遂げろと、子をなせと言われても受け入れれるはずがありませんわ。

女にとっての出産は男たちと違ってとんでもない苦痛があるものです。

肉体的にも、精神的にも。好きでもない男と交わるのが嫌でしたを噛み切って死ぬ女だっています。

それほど嫌な事なのに、さらにその男の子を孕まなければいけない女の痛みを解れとはいいわせんわ。

…ただ一つ言えるのは、あのような言い方など、女性の心に深い傷を与えるものです。ここにいる人は自分の娘が子を生む為の人形だと思っている人ばかりなのかしら？

なら……女王陛下に不敬罪で殺されるべきよ。

人としてどうかしているわ。」

そう吐き捨て女官は部屋を出て行った。

大臣の一人がつぶやいた。

「あの人はまだ十七だったのか…わたしの娘より2つも下だったのか。しっかりしていらっしゃるから、忘れていたよ…」

自覚してます？騎士団長？

女王陛下達が話しあっているはずの部屋から大臣達の悲鳴が聞こえた。

大臣達の悲鳴に女王陛下の悲鳴がが含まれていないから俺は胸をなでおろした。

一応部屋の中を確認したが、大臣達が青ざめているだけなので安心して外へ戻る。何を言ったのかは後で女官にでも聞いてみよう。

多分女王陛下が突飛な事でも言い出したのだろう。

しかし、騎士達が走ってくる音が聞こえたのでとりあえず側により、何も無い旨を伝え、ご苦労、と労って置いた。

暫く話し合っていたかと思ったら、女王陛下の怒鳴り声が聞こえてきた。

何事かと思ってやきもきしていると部屋の戸が急に開けられ、俺の顔に直撃した。…地味に痛い。

しかし、その扉から出てきた陛下が涙をぼろぼろこぼしながら早歩きで行ってしまったので、俺は急いで陛下のあとを追う事にした。

追いかけても俺にできる事は無いだろうが、それでも、あの状態の陛下を一人にする事は俺にはできなかった。

あんなに怒っている陛下は初めて見た。大臣達が何を言ったか知れ

ないが、腹の底でいやな黒いなにかが渦巻いているのが分かった。
失礼だとわかっているが、陛下の部屋に、ノックすらせず入り込んだ。扉はよほど怒っていたのだろう、半開きだった。
陛下はベッドのうえで体操座りをしていた。
ぐずぐずと肩を震わせながら泣いているあの方は、何処にでもいるただの少女のようで、細い腕で膝を抱く姿は痛々しかった。
それを見て、俺の腹の底でのたうっていた黒いなにかの動きがはげしくなった。
どうにかしてこの方が泣くのを止めたい、笑って欲しい、そう思った。
「…陛下、どうなされました、なにか有りましたか？」
「へ、へいかって、よばないでっ、」
震える声で陛下が言い出したのはとんでもない事だった。
「へ…エルネスティーネ様、でよろしいですか？」
恐れ多い事だが、女王陛下の命令だから、そう思って名前を出すと、何だかむず痒いような、焦がれる様ななにかがあたまを占領した。
「エル、でいい、から、けい、ごつかわないで…」

思わず俺は、女王陛下を抱きしめていた。泣いてる声が聞きたくなかった。何がこんなにこの方を追い詰めているのかが知りたかった。八つ裂きにしたいと思った。

「エル、もう大丈夫だ、大丈夫だから…」

胸に頭を抱き寄せて、背中をさすると、すこし陛下の嗚咽が軽くなって、ちょっとでも俺のした事はよかった事なのだろうかと、すこしうぬぼれたいと思った。

甘えてもいいですか、騎士団長。（前書き）

千越さん、コメントありがとうございました。励みになります。

甘えてもいいですか、騎士団長。

ああ、なんでこの人は私のして欲しいと思った事をしてくれるの。

たくましい腕に抱かれ、背中をさすってくれるラインに、幼子の様にすがりながら涙を流した。

いつもそうだ。一人でさみしいと思っている時には話し相手になってくれるし、褒めて欲しい時はなんでも無い事を褒めてくれる。怒って欲しいときも、怖い目にあったときも。

私は本当にこの人のこと大好きなんだわ。

勘違いかも知れないし、伝える気もないけれど。

思いにそうつけたすと、エルの胸は痛んだ。

初恋に浮かれるには彼女は立場が大きすぎた。

もっと私が小さければ、いや、私が女王で無ければ伝えるくらい簡単にできて、気のせいだ、諦めろと周りが諭してくれただろう。

だけど。

私は女王。

初恋で世間の娘たちと同じ様に心を踊らせることは出来ない。

だから、今だけ、ラインが甘やかしてくれる今だけは、愛されてい

ると夢みても許されるでしょう？

そう、誰かに問いかけて、ラインの腰に手を回し、力一杯抱きついた。

女王陛下、…（前書き）

今回は短めです。
予約投稿はしない方がいいでしょうか？

女王陛下、…

女王陛下は泣き止んだようだ。

が、俺はまだこの人を離せずにいる。

二度とする事が許されないだろう、この人を抱きしめる事を考えて、少しでも長く抱きしめていたいというよくの言い訳に、離したら、この人はまた泣いてしまわれるのでは、悲しい思いをするのではと心の中で嘯いて。

この人は女王陛下なのだ。

こんなに小さくて震えている、ただの少女のようだけれど、この国を背負って立っている、気高き女王なのだ。

女王陛下を抱きしめたり、寄る陛下の部屋にはいるなど、本当なら俺の首はとうの昔に飛んでいるはず。

それでも誰にも告げられず、俺がまだ生きていると言う事は、女王陛下がとてもお優しいのか、殺すのは惜しいと思われているのか、殺すのが面倒だと思われているのか。

もし、もしも好かれているのだとしたら、

それを信じて夢をみても良いのなら。

どんなに良かっただろうか。

俺は年端もいかぬ乙女ではない。

恋に夢みて、自分より上の身分の方に好かれ、愛されるなんて夢を見れるほど、俺は純粋でも物知らずでも無かった。

考え事ですか、女王陛下。

ライン騎士団長の腕の中でうとうとしていると、何だか前にもこんな事あったような…と思いました。

デジャヴ？

…どうしましょう、とんでもない事を思いだしました。

そういえば前酔っ払った騎士団長が夜這い？に来たときに、私の事「愛している」って言ってませんでした？

あれ、気のせいですか？それとも別の人に向けていったんですか？

私の記憶力がまだ衰えてないとしたら、（まだ十七なので衰えていないとおもいたいです）あれは確かに私に向けて言っていたはずです。きっとそうです。そうだと信じたいです。というかそう信じます！

さっき決意したばかりの思いを覆すようですが、私も女です。

叶う可能性の有る恋は叶えたいんです！

そうと決まったらいざ告白！ーーあ、でも。

もしこれが勘違いだったら。

拒否される。

それは別に構いません。辛いかもしれないですけど、沢山泣くでしょうけど、ラインと顔を合わせにくくなるでしょうけど、それでもきっと乗り越えれます。

だけど。

私は女王です。
それでライン騎士団長が断れなかったら？女王の命令だからと断れなくて、嫌々私の夫になる事を選んだら？

ライン騎士団長が本当に好きな人と付き合えなくなってしまったら？

私の事を怨む？

ジャン王子が、本当に好きな人の話をしたとき、とても幸せそうな顔をしていました。

私はそれを奪うの？

どうしてもそれは嫌です。

私には出来ません。

じゃあ、どうすれば？

……！！

そうだわ、もし本当に私の事を好きならあの人から告白してもらえるようにすれば！

…どうやって？

謹慎処分です、騎士団長。

どうも、エルネスティーネ、女王です。

今日も元気にお仕事！と思ったんですけど、ちょっとズルをしようと思います。

視察と言う名目でお隣の国ジャン王子の国目指しています！

や、ちょうど近辺国の視察に行かなきゃいけない頃合いだったのです。

決して恋バナしようとか相談しに行こうとか思った訳じゃ無いんですからね！

…いや、ライン騎士団長が道中に居ないのはあれです、職務中に持ち場を離れたので謹慎処分にしただけです…いや、厳しすぎないかって言われましたけど本当は死罪ものですよ、中で何があったか言ってないから厳しく思うだけで。

謹慎処分だからこの道中についてくるなと言ったときの団長はまた捨てられた子犬の目をしてました…

そんな目をしたって連れていけないものは連れていけません！

着いてきたら王子とお話しするときも側に控えてますとかいいそうじゃないですか！

恋バナになりませんし相談も出来ません！！

…ごめんなさい、騎士団長。

帰り、何か買って帰りましょう…

まさかのヤンデレですか？

「へえ、それでわざわざ視察にきたの。」

しさつ、をやたら強調してくるジャン王子にいらつきながら、優雅にティータイムです。

そばに控えているのは私の女官長です。

妙齢のお姉さん（こう言わないと怒られます）で男まみれの会議などでは私の味方をしてくれます。

女性ならではの細かい気遣いが素晴らしいのです。

向かいにはジャン王子とその恋人が座っているんですが、とても幸せそうに微笑んでいる美人さんです。

幸せにしてもらうんですよー

そんな念をおくりながらにこにことお茶菓子に手を伸ばします。

メヂュンのマドレーヌ、持ってきて正解ですね。

これはそのうち隣国にもメヂュンの支店ができるんじゃないでしょうか。

まあ、それは置いといて。

最近、恋をしたのでは、みたいな事を限りなくラインの話であると

周囲に悟られないようぼやかしながら話します。

「私があの人好きなのはよーくわかったんですけど…もし告白とかしちゃったらぜったい断ってくれないと思んです～…」

常々の悩みをぶちまけます。

「あぁ…そうだね、そこは困るよね。」

さすがに王子なだけあって、話をよーくわかってくれます。

「でもさー、奪ってでも手に入れたいとか思わないの？」

…とんでもない事をいい出しましたよこいつ。

へっ、とした顔をした私に目もくれず王子は続けます。

「俺だったら命令にしてでも手に入れようとするけど、あー、でもそうだな、別の人が好きだったら、かー。うーん…」

「あ！そうだ、好きな人の好きな人にいろいろして自分の好きな人と絶対結ばれないようにして何も知らないふりして慰めに行く！」

…こわっ。

隣の彼女さんも苦笑いしてます。

目が『こういう人なのよ、でもそこが好きなんだけど』って言ってます。絶対そうです。

まさか、王子はヤンデレって奴ですかね？

意外ですか？副団長。

お茶会は結局、いい案が出ずに終わりました…

ここまできて収穫無しですか…

お茶会を済まし、城下を散策する事にします。

女王がそんな事するのは珍しいんですけど、歩き回ったり下町を覗いたりするのが好きなのでついつい抜け出してでもやってしまいます…

や、今回はちゃんと副団長連れてきてますよ？

さすがにり　隣国の城下を一人でぶらり旅できるほど神経図太くないです。

ふらふらとみてまわりますが、大体何処の城下街も似たり寄ったりな気がしますね。

売ってる果物の種類が違ったりはしますけど。

あー、そうだわラインにお土産でも買っていかないと……げっ、そういえば前買った万年筆渡せてないです。

いつ渡そうかとわたわたしてたら結局渡せなかったんでした…

うーん…

街をうろついていると職人街に入りました。

こういう城下をちょっと下った職人街は珍しいものとか素晴らしい物とかがいろいろあって楽しいです。

高貴な身分の人がいくべき場所ではないですし、お嬢さんがたとかは上の服屋や菓子屋くらいにしか行かないと聞きますが職人街を見て回らないのは勿体無いです。

職人街の中を歩いていると、副団長が話しかけてきました。

「…失礼ですが陛下、こういうところには行き慣れているんですか？あまり女王の見回るような場所ではないと思いますけど…酔っぱらいとかもいますし」

あら、この人はちょっと残念。

「副団長、職人街っていうのは国力を表す物だと私は思っています。」

「何がどれくらいのレベルで作られてどれくらいの価格で売られているのか…レベルの高い物が相応の値段で売られているならば、その国は繁栄しているし、武器のレベルが高いなら、よく戦の準備をしている事になります。」

「それに、酔っ払いの方も職人さんなら泥酔はしていないし、泥酔した人間がどれだけいるかで国がどれほど落ちぶれているのかがわかるものです。また、彼らは有益な情報をもたらしてくれるものだわ。」

続けざまにそれっぽい事を述べて観光の邪魔をされないようにします。

ありがたい事に、感心しました！って顔をしてくれたので助かります…いや、城下の事については普段も結構考えてる事ですよ、別にいつもただ観光してるだけ、な訳がないですから。

…そうですよ！信じてください！

侮ってますね、副団長。

陛下は『職人街はその国の国力を表す物』なんて言っていたが、どうみても俺には子供が市に連れてきてもらってはしゃいでるようにしか見えない。

それでも、あの堅物のラインが心酔するほどの女王だ、見た目には現れない何かがあるのだろう。

少なくとも見た目的には男を手玉に取れるような女じゃねえ。

…胸も貧相だし。

声に出したらとんでもない事を考えながら副団長はエルの後ろをついてゆく。

…しかし、この小娘があそこまでの政策を推し進める様には到底見えない。

大臣や貴族の反論を全て押さえ込んで、改革を行い続けている史上最高の女君主。

全くもってそんな風には見えない、すぐにスキップでもし始めそうな少女を前に副団長は胸中複雑であった。

そもそも副団長は今まで国境警備に向かっていて、女王を実際にみたのは生誕祭と女王就任式のみである。

さらにいえば女王就任式は仕事の都合で覗く事しかできなかった。

だからこそ、初めて間近で見る彼女が『あの』女王だとは思えないのだった。

そんな事を頭に浮かべながら女王についていくと、女王が一軒の店へ入って行った。

武器屋！？武器屋と言えば荒くれ者の集まりである。

即座に止めようと思ったが、女王が一瞬顔を厳しくしたのをみて、危険なのは分かっているのか、ならば止めても無駄だな、と思い好きにさせた。

店の中は閑散としており、流石に休日で無い日の真っ昼間に武器屋にくる者もなかなかいないだろうと納得する。

女王は入るなり店主を呼び、

「私みたいな小娘でも使いこなせそうな武器を見繕ってくださいな」

と言い放った。

気のいい店主はいい店主なのです。

お店に入って言ったこと。

前々から思っていても怠惰な私が原因でできなかった事。

他の国の王たちはみな腕っ節が強く自らの身を自らで守ることができる。

だけど私は。

もし会談の時に王同士水入らずで話し合おうなんて言われたら。

なんの力も持たぬ小娘で居続ける事なんて、私にはできない。

たとえ持てる力が無きに等しかろうと、持たぬよりマシだ。

副団長はなんだこの小娘、武器はおもちゃではないのだぞ、いったような目線を投げかけてくる。

それでも。どれだけ蔑まれようと、私が力をもつことで負担を減らせるならば。

「私が抵抗する力を持てば、騎士たちの負担を軽減できます。無いより、ほんの少しでいい、あれば心も軽くなる物です。」

納得してくれたのかはわかりませんが、ふぅん、とほんの少し、音がしたのできっと分かってくれたのでしょう。

しばらくすると店主が様々な武器を抱えて戻ってきました。

此処のお店、サービス満点ですね。

「ガハハっ、こんな小さなお嬢ちゃんが自分の事小娘ったぁ言えるっつーことはよ、自分の力を正しく理解できてるってこった！」

「今の貴族は皆して自分の力を分かってねえくせに高い武器もっときゃあ強くなれると思い込んでやがる！」

「だからよ、お嬢ちゃんが私でも扱える物って言った時俺は感動したんだ！最近の貴族のお嬢ちゃんの中にも頭のいい奴が居たんだな！サービスしてやっからよ、自分に合う奴見つけな！」

「本当ですか！ありがとうございます！貴族のお嬢さん達が皆残念なわけでは無いので愛想、つかさないで居てくださると嬉しいです。」

こうゆう気持ちのいい人たちがいるから職人街や下町探検はやめられないです。

「どれがいいですかねー？」

まったくこう言う武器に詳しくないので店主さんに見繕ってもらいます。

「お嬢ちゃんだったらこの短剣とかどうよ、こっちの指輪への仕込み針とか。毒塗っといたら結構いろいろ使えんぞ。」

「なるほど！勉強になりますね、世間の皆さんは色々工夫をしてい

るものですねぇ。」

「ハハッ、お嬢ちゃんえらく年寄り臭いこと言うなあ！」

失礼な！

「むっ、まだ花の十代ですよ！」

言い返すとやっぱり店主さんは髭面を愉快そうに歪めて、そういう言い方がババくさいんだよ、と言うのでした。

酷いです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5462x/

騎士団長、無礼ですよ

2011年11月22日00時33分発行